

韓国における初級段階での交流型日本語学習 ～交流型学習とコミュニケーション能力の関係～

西岡 麻衣子

要 約

現在の日本語教育界では、場面や状況設定を重視した学習者中心かつ内容中心の授業が主流になり、それに応じた言語運用能力やコミュニケーション能力の育成、またそのための社会文化的要素の理解が欠かせないという見解が主流になっている。具体的にはタスク先行型授業、プロジェクトワーク、文化を取り入れた授業など様々な試みがあげられるが、これらの試みも場合によっては教室内での架空の設定のため実感が伴わなかったり、断片的であったりする弊害や、中・上級レベルになってから取り入れられるという問題点を孕んでいる。よって本研究では、初級段階の日本語学習者に対し総合的日本語教育の一つである交流型学習を試み、それに伴うコミュニケーション能力の習得過程を観察し、交流型学習とコミュニケーション能力の関係を明らかにしたいと思う。（※本稿は筆者の修士論文の研究計画である。）

【キーワード】

総合的日本語教育、社会文化的アプローチ、交流型学習、コミュニケーション能力、インターアクション

1. はじめに

日本語教師として日本、韓国の教育現場に触れて数年になるが、学習歴が長くても「なかなか話することができない」「上手にコミュニケーションを取ることができない」学習者がいることに疑問を抱いてきた。現在の教育現場では、知識の詰め込み、いわゆる「文法項目積み上げ式学習」の限界が指摘され、学習者かつ内容中心、また文化を取り入れた授業が求められ、教室内外で様々な試みが行われている。

筆者が勤務していた日本語学校でも日本人ゲストを招いたビジターセッションや料理教室、地域小学校への訪問や日本人家庭へのホームステイなど様々な交流・体験型学習が行われ、ネイティブスピーカー、日本人コミュニティと積極的に接触し、インターアクション能力の向上を図ってきた。コーディネーターとして参加した筆者が最も強く印象に残った点はこのような交流型学習に対し学習者の満足度が極めて高いという点であり、トムソン（1999）も「日本人協力者を日本語教育の現場に参加させることは、自律学習の促進のためにも動機付けを高め」、「学習効果を上げるためにも第二言語習得の研究から有効である（Pica 1994）」と述べている。

また接触場面の限られた TJFL 環境でこそ交流の要求度は高いと考え、日本語学習者数が最も多い韓国において交流型学習を試み、交流型学習とコミュニケーション能力との関係を検討し、交流型学習の課題と展望を明らかにしたいと思う。

2. 交流型学習とは

2.1. 交流型学習の定義と類型

李（2005）は日本語教育における交流を「異文化間の学習者同士が互いに触れ合うこと」とし、「相互経験のやり取りである経験の共有」と定義付けた。そして交流型学習を総合的日本語教育（言語の認知的意味の理解と表現力を養うために、言語文化行動を成す諸要因を総体的にする教育）の一つとして取り上げ「言語情報の総合性を総体的に捉えていく上で効果的な学習法」とし、言語と文化理解の習得が同時にできる点を利点としてあげている。

交流型学習の類型としては具体的には日本人ゲストを招いてのビジターセッション（インタビュー、ポスターセッション、ディスカッション等）、相互訪問やホームステイ、イベントへの参加などの直接交流型学習とメールやビデオ、遠隔授業などの間接交流型学習があげられる。

2.2. 交流型学習の理論的背景

先にあげた李（2004）の総合的日本語教育のほか、学習を社会的文脈の中で起こると捉える社会文化的アプローチ（状況的学習論とも呼ばれる）、特にレイブとウェンガー（Lave & Wenger, 1991）の提唱する正統的周辺参加の概念も交流型学習の重要性を裏付けると言える。レイブとウェンガーは本来の意味の学習とは、人が何らかの文化共同体の実践に参加し、新参者から古参者へと成長する過程であるとし、社会的な実践から切り離された教育を批判し実集団との交流を通

して体験を試みることの必要性を説いている。

3. コミュニケーション能力とは

本研究は交流型学習とコミュニケーション能力の関係を明らかにすることを目的としているが、では果たしてコミュニケーション能力とは何であろうか。ネウストブニー（1995）はコミュニケーション能力を大きく言語能力と社会言語能力に分け、インターアクション能力を、上記の二つの能力に社会文化的能力を加えたものと定義している。つまりコミュニケーション能力は言語能力より広く、インターアクション能力より狭いカテゴリーだと位置づけられる。

言語能力は文法や用法、語彙力、発音能力などを駆使して正しい文を作り出す能力であり、社会言語能力とは例えば相手との関係により挨拶や敬語の切り替えなどができる能力であり、社会文化的能力とは社会的慣行に適合できる能力といえよう。しかし行動の社会言語的規則を生起させるには長い時間を要するため、測定することは大変困難であり、さらに社会文化能力を測ることはなおさらである。どのようにこの問題を解決するかが今後、筆者にとって極めて重要な課題であろう。

4. 実践（予定）

<対象>

韓国の大学付属の語学センターで学ぶ韓国人初級日本語学習者

<協力者>

韓国の大学付属の語学センターで学ぶ日本人韓国語学習者また韓国在住日本人

<期間>

2008年 春学期

<分析データ>

- (1) 日本語学習者本人によるレポート
- (2) 日本人協力者によるコメント
- (3) 教師による観察記録
- (4) ACTFLのOPIテストもしくはSJPT（検討中）
- (5) 社会言語能力の評定を主とする運用能力テスト（検討中）

5. おわりに

日本語教育の現場は、言語能力だけ伸ばすことを目的とするのではなく言語、社会言語さらには社会文化を包含した「日本語インターアクション・コース作り（井村2004）」が求められている。交流型学習は学習者のコミュニケーション能力、さらにはインターアク

ション能力を高めるアプローチではあろうが、それらの能力とどのような関係があって、どのような効果を及ぼすかについて、今後、能力の測定の課題を解決しつつ実践を通して考察して行きたいと思う。

外務省によると日韓間の人の往来は2005年に約450万人に達し、また韓国在住の日本人も年々増加している。このような日本人を人的リソースとして日本語教育の現場に役立てることは大変意義のあることだと思われる。交流型学習を通して、外国人学習者が日本人とまた日本人コミュニティと触れ合うことにより、双方の異文化理解が促進されることを願ってやまない。

謝辞

今回の発表は筆者の研究計画の構想ということで、大変不十分な内容であったにもかかわらず北京外国語大学、お茶の水女子大学の皆様に暖かいアドバイスをいただき本当に感謝しております。皆様にご指摘いただいた点を今後の課題として研究を進めていきたいと思っております。ありがとうございました。

参考文献

- 李徳奉（2004）「総合的日本語教育の位置づけ—その認知的意味属性を中心に—」『日本語教育国際研究会予稿集』PP171-176
- 李徳奉（2005）「日本語教授法としての『交流の位置づけ』」『第5回日本語教育国際フォーラム要録』PP30-32
- 李徳奉（2006）「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究海外調査報告』PP171-178 国立国語研究所
- 李徳奉（2007）「韓国の日本語教育における 文化・連結・コミュニティ」『日本語教育』133号 PP11-14
- 市川伸一（1995）『学習と教育の心理学』岩波書店
- 井村多恵子（2004）「日本語母語話者との会話インターアクションの薦め：海外で有効な教室外体験学習法」『世界の日本語教育』14号 PP125-148
- 上野直樹、ソーヤーえりこ編著（2006）『文化と状況学習—実践、言語、道具、人口物へのアクセスのデザイン』凡人社
- J.V.ネウストブニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウェンガー（1993）『状況に埋め込まれた学習』産業図書
- トムソン木下千尋（1999）「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者—その問題点と教師の役割」『世界の日本語教育』9号 PP15-28
- トムソン木下千尋（2007）「地域社会に広がる学習者共同体—オーストラリアの日本語教育の場合」『日本語教育』133号 PP15-20

水谷修、李徳奉編（2002）『総合的日本語教育を求めて』
国書刊行会
宮崎里司（1999）「インターアクション能力の習得を目指

したイマージョンプログラム：98年度早稲田・オレゴン
での試み」『講座日本語教育』第34分冊 PP197-211

にしおか まいこ／同徳女子大学大学院 日語日文学科 修士課程1年
jptmaiko528@yahoo.co.jp